

## ● 北 陸

### 響 敏 也

取材対象に埋没せず、適度な距離感（これもDistanceか）を保つ。

そういうのが理想的なジャーナリズムの姿勢だという。近過ぎては全体を捉える大らかな視野に不足があり、遠過ぎては細部への細やかな視線が行き届かない。

と、理屈を先に歩かせて文を始めたのは、もちろん訳があるから。この欄…北陸の1年を伝える紙幅では、それなりに距離を取った姿勢で、北の街々と芸術文化に視線を巡らせてきた。しかし、人類の歴史始まって以来の「全人類同時的文化荒廃危機」に瀕して、先述のように取り澄ました理想論など、言っておれない。こんなときは特例だ。

オーケストラ・アンサンブル金沢の創立からの歴史の光と影を誰よりも熟知し、楽団を世界水準で知られるまでに運営面で支え、現在は「いしかわ金沢 風と緑の楽都音楽祭」総合プロデューサーとして国内外を駆け回る山田正幸氏の話をお聴こう。現場に距離ゼロ接近した。

山田 音楽なら、まず始めに生演奏あり。というのが私たちの〈普通〉ですね。

ところが近頃は、一度も生の音楽体験がないまま大人になる子が多い。けれども、この北陸の地で生の音楽、それも国際級の演奏家や楽団に触れる機会なら、充分にあるのです。

【ええ、東京や大阪の子たちより多く国内外の演奏家の生演奏に触れることも可能でしょう？それに北陸の演奏家の水準も高い】

山田 可能ですね。けれど、その前に電子機器の利便性と数が圧倒した。最新のデジタル社会の、とびっきり便利な面と、弊害が心配される面、この2面性こそが問題の淵源です。

【つまり「仮想性」からくる問題ですね】

山田 確かに教育の密度や、教育環境の整備の点で、これまで存在していた地域差のかなりの部分は消えました。ITやAIの前では一気に距離や格差はなくなります。同じスタートラインです。これは素晴らしい。ただし目的地を見失いがち。コピー物を本物と信じる。

【音楽で言えば、エジソンの蓄音機や電蓄の時代から、現代のオーディオの精度まで、全部がVirtualですね】

山田 素敵なオーディオ機器で絢爛豪華な大管弦楽を聴く楽しみ、それは好む時に繰り返し可能だ。ただ1度限りの命で消えてゆく生の音楽とは違う。

【変なたとえですが、旬のカニの味と、いつも変わらぬカニかまのの違い…】

山田 まさにそれですカニも、カニかまも旨い。けれどカニかまを日蔭の偽物にすることはない。あれはあれで別物と知ったうえで楽しむ。音楽もLPでもCDでも、あるいはネットで膨大なライブラリーが自分の自由に視聴出来て、どこへでも移動可能になっても、コピーものはコピーです。別の楽しみです。

【今年の公演で、心に思うこと多くあった舞台についてお聞かせください】

Y 春の音楽祭がウィルスの影響で悔しい思いをしました。そこで秋の陣に春秋含めて1年の熱を込めました。お客様もウィルスの影響下から離れて心を遊ばせる時間を求めておられたよ

うで、双方で相寄る魂。どの公演も心底からの暖かい拍手に包まれ、「深々と音楽に浸って、生き返った思いがします」と言って帰られたお客様もありました。

よく「音楽に何ができるか考えて」ということが言われますが、考えなくても音楽は既に人が気づく前から、人の心を救ってきたわけです。

具体的に公演内容について言えば、まずバレエでしょうか。あれは総合力の成果といえるでしょう。舞台上のバレエ界の出演者も、舞台を支える位置に布陣したオーケストラ（OEK）も、みんなが心を分け合い結び合いして、演者もスタッフも、一枚岩になったような強さ、強い美しさが舞台から一直線に届いて、感動しました。それに、これはもう名物になってきましたが、泰西名曲の精華と、能の静と動が同じ舞台上並び立つ時間、昨年は北欧ノルウェーのグリーグの作曲した希代の放蕩児《パール・ギェント》と芥川龍之介の希作《杜子春》を、ソプラノも能謡も、舞踊も能舞も、弦楽四重奏もとずり並びながら、しかも幽玄を保ちつつ、という舞台を狙って、ほぼ出演者や制作スタッフの思い通りの仕上がりになったかと、人々の仕事ぶりに感動しました。

戦後の街で、歩きながら栄養失調で倒れていく「行路病」の死者が珍しくなかった頃、久々に開かれる音楽会の切符発売の日、青い顔をして足元がフラフラする人たちが会場を二重三重に取り巻いて、発売の瞬間を待っていた。誰もが一日二度がようやくだった食費を節約、一日一度にしてチケット代を作り並んでいたという。人は音楽が、文学が、美術が舞踊が芸術がなくは人としての気高さや誇り、人ならではの憧れを生きられない。

衣食足りるだけでは、礼節だって命だって養えない。本稿、異例の体裁ながら、世界がウィルスに怯える時代だからの思いで記した。